

カヤックで急流下り 「スキルアップに」ノベスタのスタッフ陣

延岡

延岡市のアウトドア観光を案内するNPO法人ひむか感動体験ワールド高橋勝栄理事長・ノベスタのスタッフらが14日、カヤックで五ヶ瀬川

の急流下りに挑戦した。ノベスタが同市北川町の北川支流・小川で行う「カヌーツーリング」の本格的なシーズンを迎えた。スタッフの技術アップを図る狙い。ノベスタ川部会の三井寿展さん(56)ら上級者5人が参加した。

使用したカヤックは、「ロデオ艇」と呼ばれる艇長の短い1人乗りタイプ。北方町楨峰からこぎ出し、パドルでバランスを取りながら白く泡立つ急流を豪快に乗り越えた。

途中では、艇が転覆した時にパドルを使って体を回転させて浮き上がる技術も練習。同町八峠までおよそ4キロを2時間ほどかけて下った。

北海道でラフティングという急流下りのガイドを経験し、今年5月に延岡市へ移住した南昭年さんは(43)は「五ヶ瀬川は水がきれいで周りの景色もいい。北海道に比べて水温も高く、すごく快適だった」と話していた。小川のカヌーツーリングはノベスタの人気プログラムの一つ。昨年は、7月中旬から8月末までに県外を中心にして400人以上が訪れた。三井さんは「五ヶ瀬川は上級者向き。カヌーやカヤックの

ツーリングは安全な小川で楽しんでほしい」と話していた。



白く泡立つ五ヶ瀬川の急流を豪快に下るノベスタのスタッフ

ふるさとエッセー

郷土文化の担い手たち

宮崎県民俗学会会長 原田解

4

音の出ない楽器

作家で宮崎県立図書館長だった中村地平さんは「南方文学」の提唱者として知られているばかりでなく、幅広い人脉で中央と地方との文化交流や、南国日向の風土や歴史を生かした「ふるさと再発見」への目配りが行き届いていて、さすが作家の考えは違うなあと、何時も感心させられていた。

また、そうした縁で宮崎を訪れる芸術家やジャーナリストも多く、私も図書館の仕事を通じて画家の海老原喜之助や、童話作家の椋鳩十、それに「東京文学散歩」の野田宇太郎といった方々にお会いしそれぞれの分野の話を聞くことができた。いま振り返っても、これはたい

へん貴重な体験だったと思う。当時の館長は「中村学校」と呼ばれていったほど魅力的な存在で、これをベースキャンプにして個性豊かな若者たちが、次々と育てられていったのである。

同じように昭和24年に誕生した「宮崎管弦楽団」だったが、その道筋には思いもよらぬ「つまずきの石」が待ち受けていた。というのも、ようやく旗揚げまで漕ぎ着けたものの、日常の暮らしはまだ不安定で楽器類を手に入れられるのも大変だったからである。そのため団員たちは対応に頭を悩ませていた。



クロスマスの思い出を語る杉尾敏さん

しろ戦後間もなくですから、楽譜や譜面台などの調達はもちろんのこと、軍樂隊にいた人や樂器を見つけて来るのもひと苦労でした。笑えない話ですが第1回の公演の際には、コントラバスやティンパニーは、形だけを真似た物で間に合わせたのですよ、町の大工さんに頼み込んで作らせたいわゆる張りぼてですわ」

音の出ない樂器を面白目な顔で演奏していたという、樂員たちの苦勞ぶりや役者ぶりが偲ばれるエピソードである。こうして何とか富崎市でのお披露目を迎えることができたのである。当日のプログラムによれば曲目は

- ①結婚行進曲（真夏の夜の夢）
- ②越後獅子（長唄）
- ③子供の眠りと目覚めの風景
- ④中央垂直細胞の高原にて
- ⑤満州民謡（花）
- ⑥管弦楽「運命」より

となっている。

会場の客席で熱心に聞き入つていた私にとつても、この夜は、忘れられない「音樂事はじめ」だつた。